

会 員 の 声

独 白

小 澤 守*

どういふ経過からか、会員の声欄で一声をあげるはめになった。ない知恵を絞って、さて何を書こうかと考えたとき、著者自身がエネルギー関連問題に肉薄して研究を行った経験もなく、したがって本会で講演をしたことも、当然論文を書いたこともないのを再認識した。つまり著者にとってこの欄がデビューの第1ページとなった次第である。さて、ない知恵を絞って考えていると、ふとエネルギー問題の本質は何かなと思ひ始めた。18世紀以降の急速な技術発展を経過して、今や21世紀に手がとどこうとしている。その間、我々の消費したエネルギーは想像もできないくらい大きく、さらに今後も増えつづけていくことだろう。先進国はますます発展を望み、発展途上国も今から伸びようとするとき、何よりもまず問題になるのは資源、しかも偏在する資源である。つまりエネルギー問題はある面で資源問題に変質し、いかにその資源を確保するか、つまり政治・経済問題に帰着する。著者が在籍した大阪大学で、石谷先生より環境に放出できるエネルギーの量には、人間生存のための許容限界が存在し、その点からエネルギー消費は大きく規定されることをよく聞いた。つまりこの面に沿って言うとエネルギー問題は環境問題に帰着する。そして環境の許容限界は単純に物理量として測定できるもので一義的に安易に決定できず、その時の社会的な許容度によって規定される。つまりこの点ではエネルギー問題は社会問題になる。もちろん原発等に見るように政治問題に容易に発展する。このようにみえてくるとエネルギーについて語るとき、社会、政治、経済等との関連を無視しては語れないように思う。

我々研究者(?)が何か論文を書くとき、ある種の

枕ことばのように「エネルギー変換効率の改善」とか新しい変換方式とか書くのは常であるが、本当にそれだけでよいのかどうか? それによって新たな資源問題、新たな環境問題を引きおこさないか、また引きおこすとしてもそれは Social acceptable なものかどうか? 本当はそれらの問題を十分考えた上でないと社会に対して責任を有している(?)研究者たりえないのではないかと?

話が大きくなってきたが、考えていくうちにだんだん悲観的になってきた。著者のような不とどき者は、何のために研究をするのかと問われたら、即座におもしろいからなどと答えて、社会的責任など全くはたしていないのではないかと思っている。何のために研究するのかという問に関連した話であるが、著者は博士課程在学中に気液二相流の不安定流動に関する研究を行っていたが、ある時、何のために研究をするのかと正面から問われて答えられなかった。あとで別の人と話をしていた、このことを言ったら「学位論文を書くためだと答えればよい」と教えられた。これは迷案だったが今ではもう使えなくなっている。

こういうけしからん会員もエネルギー・資源研究会はかかえていることを強く認識し、エネルギー資源問題と社会、経済、政治とのかかわりや、技術者、研究者の社会的責任等の読みものもたまには載せていただけないだろうか、と身勝手な事を考えている次第である。

なお、本会の会誌は分野がかなり広く、寝ころんで読める記事も少なくない。会誌がますます面白くなり、活発な誌上討論など展開されることを切に望んで、筆を置くことにする。かく言う著者はエネルギー・資源研究会で、会員として何かできるのだろうか? 会員としての責任をはたしうのだろうか?

* 神戸大学工学部生産機械工学科 助手

〒657 神戸市灘区六甲台町